

石くり通信

8月号 夏特別号

ロータリークラブ

院長 石川 悟

ロータリーとは、お金持ちの年寄りがいっしょに昼食を食べる会、と言われると、当りずとも遠からずの感があります。年会費を十万円から二十万円くらい支払って、特に利益を得る訳でもなく、「奉仕」のためにお金を使うクラブは、一般の人から見ると、奇異に映るかもしれません。しかし、簡単に言うと「善意と平和を築くために国際規模で組織された職業人の集い」ということになります。もっと厳密に言うと「人道的奉仕を行い、あらゆる職業において高度の道徳的規準を守る事を奨励し、かつ世界における親善と平和の確立に寄与することを旨とした実業人および専門職業人が世界的に結び合った団体」です。

ロータリーの誕生

二十世紀初頭のシカゴの街は、著しい社会経済の発展の陰で、商業道徳の欠如(儲かれば何をやってもいい)が顕著でした。青年弁護士ポール・ハリスはこのような風潮に堪えかね、友人3人と、お互いに信頼のできる公正な取引をし、仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やしたい、という趣旨で会合を持ちました。集いを各自の事務所持ち回りで順番に開くことからロータリークラブという名前になりました。創設後わずか16年の間に、ロータリークラブは6大陸へと広がりました。

日本のロータリー

わが国最初のロータリークラブは1920年(大正9年)東京で創立され、翌年世界で855番目のクラブとして、国際ロータリーに加盟を承認されました。第二次世界大戦で国際ロータリーから一時脱退しましたが、ロータリアンはリスクを覚悟して、非公式にミーティングを続け、1949年復帰しました。戦後はロータリーのみならず、国の再建に大きな力を発揮しました。2015年4月現在日本全体でクラブ数2278、会員数は89003人です。

ロータリーの活動

国際ロータリーは平和の推進、疾病との闘い、きれいな水の提供、母子の健康、教育の支援、地域経済の発展を応援しています。特にポリオ撲滅の活動には力を入れ、1979年、フィリピンで600万人の子どもたちにポリオの予防接種を行うプロジェクトを開始し、これが世界的なポリオ撲滅活動のきっかけとなりました。野生ポリオウイルスが存在する国(ポリオ常在国)の数は、1988年の125カ国から、2012年には三カ国にまで減少しました。世界からポリオが無くなるまで、今一歩のところまで来ています。

日立南ロータリークラブ
私が2013年より会員となった日立南ロータリークラブは、1962年に創立されました。現在会員数29名、毎週火曜の午後例会を行っています。

社会奉仕活動として、精神障害者自立支援組織NPO法人ふきのとうの会を支援、青少年奉仕の活動として日立南ロータリークラブ杯ミニバスケット大会支援、国際奉仕活動として姉妹クラブ ワイキキロータリークラブとの高校生短期交換留学事業などを行っています。

最後に

ロータリーを語る上で「四つのテスト」をはずす訳には行きません。職業人としてのロータリアンの心構えを、一般の人にも理解できるように、簡潔かつ的確にまとめたものが「四つのテスト」です。

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか



カウンセリングルーム開設

薬剤師 石川 恵

前にもちよつと書きましたが、カウンセラーの資格を取りました。それに伴ってこれから少しずつ、このクリニックでカウンセリングを始めたいと思っています。学校や職場の人間関係友人・夫婦関係、仕事のストレス、家事、育児、介護など...人間というものは本当に悩みの尽きない生き物です。今の時代、心の中にモヤモヤを抱えていない人はいないのではないでしょう。実はそういったストレスは他人に話すだけで発散できる事も多いのですが、この現代、皆自分に手一杯で他人の愚痴に耳を傾けている余裕はない。

そこで私の出番。カウンセリングと言うより「悩み相談室」? 「王様の耳はロバの耳」室(的)な感じで(笑)この何とも言えない嫌な感情や悩みをどう発散(解決)していくか、そんなことを一緒に考えていけたらいいなと思っています。もちろん具体的な症状でも構いません。自分ではなく家族のことも構いません。特に生活リズム障害、不登校、不眠症、鬱、不安障害などは、私自身嫌というほど体験済みなので、少し違った観点からアドバイスができるかもしれません。

こんな私ですが、もしカウンセリングをご希望の方は、受付に声をかけていただけたいと思います。お電話でも承ります。(0294-33-7788 石川クリニック 石川 恵まで)ちなみに通常は土曜日の午後で、詳しい日付・時間は応相談。料金は三十分あたり千円です。どうぞお気軽にお問い合わせください。

よく生き、よき死を迎えるための医療

事務局長 石川 都

現代医療は、日進月歩の技術向上により、病氣は治るようになり、寿命も延び、日本人の平均寿命はほぼ世界一となりました。しかし同時にますます細分化・専門化した医学は身体の機械的交換・修復術の様相を帯び、「木を見て森を見ない」専門医も増え、体のあちこちに不調を抱える高齢者からは、病院に行ってもどの科に行けばよいのかわからないという声も聞かれます。

百歳を超えた聖路加国際病院名誉院長の日野原重明氏は、現代日本の医療の先駆者です。大都市の病院は大規模災害の拠点病院たるべしとして、大改造した聖路加国際病院は、地下鉄サリン事件の際にその成果を見事に発揮しました。彼は今後の医療で重視すべきは、予防医学と終末医療だと述べています。従来のように疾患が表面化してから病院にかかるのではなく、普段から生活態度や食習慣に留意してセルフコントロールし、将来の病気を予防することが大切であると、それまでの成人病から生活習慣病という呼び名に変えました。また今の日本の医療で最も遅れているのは終末医療だとし、超高齢化社会に向け、人は一分一秒を永く生きることもよりもQOL(生の質)を重視し、最期の時まで自分らしく生きて死ぬような心構えと準備をすべきで、それを支えるのが医療だと説きます。彼の述べる豊かな終末医療とは、日々の看護では吸い込みの生ぬるい水道水でなく一かけの水とレモンを浮かべたグラスの水を差し出せること、そして臨終時には医療機器に囲まれた孤独な死ではなく、家族に囲まれ感謝や別れの言葉を交わせるひとときであると言います。

近年の精神免疫学や精神腫瘍学の解明により、笑い・希望・愛などの心の姿勢が心理面のみでなく体内の免疫力を上げ、治療効果を上げることは、以前この欄で紹介しました。そうしたホリスティック医学の考え方を半世紀以上も前に米国から導入した日野原氏の、「医学とは(人間のあらゆる面に関わる)総合的人間学である」という言葉は本当に重みがあります。

今月から当クリニックで開設されるカウンセリングも、多くの皆さまに活用されることを祈っております。どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。